

---

# 明日へ

星 明莉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

明日へ

### 【Nコード】

N3922D

### 【作者名】

星 明莉

### 【あらすじ】

コナンと蘭は二人でショッピングに来ていた。しかしそこで拳銃を所持した強盗殺人犯に出会ってしまい、空手の全国大会出場を控えた蘭に悲劇が起こる。そして罪悪感に苦しめられるコナン。今、二人の前には大きな試練が！！シリアスですが、感動いっぱいストーリー（のつもり）をお送りします

## 第01話 危険な出会い

小さな名探偵・江戸川コナン。

それは高校生探偵・工藤新一が黒ずくめの組織に【APT X 4869】という名称の毒薬を飲まされ小さくなった仮の姿。

現在は組織の情報を探るため、幼なじみの毛利蘭の家の探偵事務所に居候している。

これは、その事件から少し経ってからのお話し…。

コナンと蘭は杯戸ショッピングモールに向かっていた。

『…です。なお、強盗殺人犯の男は未だ拳銃を所持したまま都内を逃走中です。…』

「あらやだ、物騒ね」

電気店のテレビのニュースに、蘭は呟く。

「大丈夫だよ、蘭姉ちゃん」

もしものことがあっても絶対俺が守ってやるよ…。

コナンはそう思いながら続ける。

「それに、なんたって空手で関東大会優勝だもんね！」

そう。

蘭は先月行われた空手のジュニア関東大会で見事優勝したのだった。その大会は地区予選も兼ねていて、上位入賞者は全国大会の出場許可を得られるようになっていた。もちろん蘭は夏に控えているその大会のために、毎日練習に励んでいる。

「蘭姉ちゃんならきつと全国レベルでも優勝だよ」

「フフ…ありがと、コナン君」

この時のさり気ない会話が、後にコナンと蘭の心を蝕むことになる。とは2人共、夢にも思っていなかった…。

### 杯戸ショッピングモール

「ねえコナン君！これとこれ、どっちがいいかな？」

コナンと蘭は一通り買い物した後、雑貨店に来ていた。

「え？ど、どっちでもいいんじゃない…」

コナンは蘭の長い買い物に退屈し始める。その時だった。

チャリーン…

横を歩いていた男性が落とし物をしたようだった。

コナンはすかさずそれを拾う。

「車のキー？」

コナンはしつくりこなかった。女性の連れを待っている様子でもない男性が、なぜ車でここへ来ているのだろうか…。

男性が一人で大量に買い物するような場ではないのに。

「あら、なーに？その鍵」

蘭が不思議そうに問い掛ける。

「今歩いてきた人が落としたみたいなんだ。ボクちょっと届けてくるね…ってあれ？」

気が付くと男の姿がどこにもない。

蘭はそのことを察して言った。

「連絡所に預ける？」

コナンは首を振って答える。

「その男の人、多分駐車場にいると思うよ！階段に向かってたから…」

この雑貨店は一階。

階段で行くとすれば二階か地下の一階だが、二階は女性用の下着を売っているフロアであるため、消去法で男性は地下一階の駐車場へ向かったとコナンは推理した。

「そう…それなら私も行くわ」

「じゃあ急ごう。その人がキーが無いのに気付いて行き違いになるかもしれないから！」

こうしてコナンと蘭も駐車場に向かった。

## 駐車場

「あっ、あの人だよ！」

コナンはそう言っつて男に駆け寄る。

丁度その時、男は胸元から黒い光沢の物を取り出した。

「……！！拳銃……！！」

まさかこいつ……今朝のニュースの！？

コナンがそう考えた時にはもう遅かった。

拳銃を握った男と目が合ってしまったのだ。

男は舌打ちをしてコナンに銃口を向ける。

そして男の口元が冷たく笑った……。

## 第02話 命懸け

…パンッ!

放たれた弾はコナンの衣服の肩部分をかすった。

「コナン君!？」

銃声で異変を感じた蘭は思わず叫ぶ。

「ち…もう一匹いやがったか」

男は呟くと、銃を構え直す。

パン!パンパンッ!!

「…っ!」

(え……蘭!?)

蘭は滑り込みでコナンを抱きかかえ、守ったのだった。

「んっ…!痛…」

「蘭…」

コツコツコツ…。

「おい、始末はいいから早く乗れ!!人が来る」

「あ…ああ」

(…車の中に仲間!？くそっ…マスターキーを持ってやがったな!  
!)

ブロロロロ…。

(行っちまう!ナンバーを覚えねえと…)

コナンは車を追いかけてしようとしたがハツとした。  
蘭だ。

さつきから左足を異様に痛がってるように思えた。

(まさか…オレを助ける時に骨でも折ったのか…!?)

車のエンジン音はもう聞こえなくなっていた。

「…蘭？」

「コッ…コナン君？…無事なの…ね…っ？」

「うん、ボクは大丈夫。それより…蘭姉ちゃん、足どうかしたの！？」

「わ…分からない…いけど…っ、踏み切った…左…足がっ…」

「あの…どうかしました？」

そこへ、先ほどの足音の主がやって来た。

「今すぐ救急車と警察を呼んで！！」

コナンはすかさず叫ぶ。

「え？…何があっ…」

「いいから急いでっ！！！」

そして蘭の体は米花総合病院に運ばれた。

病院には蘭の父親である、毛利小五郎も駆けつけた。

蘭は手術室に行き、小五郎は医者から簡単な説明を受けた。

「おじさん…蘭姉ちゃんは？」

「やはり手術だそうだ。なんでも左膝の靭帯を切ったらしくてな…」

「じ、靭帯だと…？」

コナンは血の気が引いた。

靭帯の怪我は完治に何ヶ月という時間がかかる。

おまけに完全断裂すると再起不能になる可能性もあるのだ。

つまり、蘭は再起不能は免れたとしても全国大会には確実に出られ

ない。

「蘭…オレを助けた…せいで」

「まあ、今回の執刀はスポーツ選手なんかの手術で有名な先生だそうじゃねーか」

「…」

「それからお前が拾った犯人の車のキーだが…お前の指紋以外、何も出てこなかったそうだ」

「…」

「今はお前の証言をもとに捜査中だ。まだ逃走中の強殺犯と決まったわけじゃないしな」

2時間後

ガチャッ！

ガラガラ…

「…」

「先生、娘は？」

「ご安心下さい、手術は滞いなく終わりました。お嬢さんは眠らせておきましたので」

(蘭…)

コナンは疲れきった青い顔の蘭を見つめた。

翌日

「あら、コナン君！来てくれたの」

「う…うん」

一日経って、蘭はすっかり元気になった。

左足のギプスが痛々しいが、いつもの蘭だ。

「私とお父さんはしばらく家に帰れないから、阿笠博士の家に泊ま  
ってね」

「…うん」

コナンは蘭と目を合わせられなかった。

蘭のことだからきつと表に出してないだけで、全国大会のことを心  
から悔やんでいるはず。

そう思うと、コナンは込み上げてくる感情を押しさえ込むだけで精一  
杯だった。

とても笑えそうにない。

「…どのくらいで直るの」

蚊の鳴くような声でコナンは聞いた。

「それがまだ分からないのよ。私の頑張り次第でもあるみたいだし」  
「そう…」

「…コナン君？どうかした？」

蘭のその言葉にコナンは小さく笑って答えた。  
心配をさせたくない。

今は自分のことだけ考えてほしい。

その思いから出た少しの笑顔と言葉だった。

「ううん。じゃあボク、博士んち帰るね」

コナンは小走りで病室を後にする。

そのまま男子トイレに行き、個室に入った。

しーんとしたその空間で、蘭の前で押し殺していた感情が溢れ出す。

コナンはその場にうずくまった。

泣きたくはなかった。

コナンを気遣って微笑む健気な蘭を思うと…泣きたくはない。

今、一番辛いのは蘭なんだ…。

必死にそう思うと少し気持ちが落ち着いて、コナンは博士の家へ向かった。

## 第02話 命懸け（後書き）

（後書きトーク・・）ノNo.01

星「本日はゲストをお呼びしてまーす。西の名探偵こと服部平次くんでーす」

服部「いや〜どもども！皆はん元気しとります？」

星「服部君には蘭の鞆帯の怪我についてお聞きしましよー」

服部「なんやて！？おい、聞いてへんでそない話！」

新出「では僕が説明しましょう」

星「きゃ〜！新出先生！思わぬゲストにスタジオ騒然です」

新出「コナン君が蘭さんに足がどうしかたのかと聞いた時、蘭さんは『踏み切った左足が』と言っていましたよね？これはコナン君を助ける時に滑ったにも関わらず無理矢理跳んだんでしょ。こんなことしたら誰だって鞆帯怪我しますよ…皆さんも気を付けて下さい」

星「はい〜新出先生、専門トーク有難うございまーす！」

服部「それで俺はなにしに来たん？」

星「では服部君にはシメの一言をお願いしましよー」

服部「せやなー、まあ皆さんこの明日へ、始まったばかりやけど応援したつてや！感想待ってるそやで〜。ところで俺は出演するんか？」

星「検討中です。時と場合によりまーす。それでは皆さん、またねー」

### 第03話 目の前は

阿笠邸

「よお博士！これからしばらく世話になるぜ」

コナンはそう言いながらテレビに目をやる。

「ああ、それで…蘭君はどうじゃった？」

「！」

“蘭”この言葉にコナンは反応してしまう。

「別に…元気そうだったよ」

思わず博士と目を逸らす。

「あなたを気遣ってでしょうね。彼女の明るさ…」

こう言ったのは博士の家に住んでいる灰原哀だった。

「灰原…」

「健気よね…あなたのせいで夢への一步を潰されてしまったっていうのに」

「これ！哀君！！」

エスカレートしていく哀の言葉を博士が遮る。

しかしコナンの脳裏にはその言葉がしつかり刻み込まれてしまった。

(オレのせいで…蘭が…全国大会に出られなくなった…)

先日の会話が蘇る。

『なんたって空手で関東大会優勝だもんね！』

『蘭姉ちゃんならきつと全国レベルでも優勝だよ』

「…」

「新一、気にするんじゃないぞ？君に責任はないんじゃないから…」

コナンは言葉が出なかった。

オレに責任がない…そんなわけがない。

キーを連絡所に預けていれば犯人と遭遇してしまうことはなかった。

そくだ…蘭の連絡所に預けるかという提案を否定したのは…。

オレだ…。

コナンの思考はどんどん悪い方向へと進む。

### 米花総合病院

蘭はギプスの上から自分の膝をさする。

「焦っちゃ駄目よ…蘭…」

自分で自分に向けた言葉。

ベットの上で小さく呟いた。

10分前

「毛利！大丈夫か？」

「数美先輩！」

蘭の空手部の先輩が見舞いに来た。

「これお見舞い！ごめんね〜レジ袋で」

数美はそういつて袋いっぱいりのりんごを差し出した。

「たった今、コナン君が帰っちゃったところなんですよ」

蘭は残念そうにりんごを見つめる。

「ああ、あの幽霊騒ぎの時の子ね！」

「ええ…」

数美は椅子に腰掛ける。

「それしにても残念だったな、毛利。せっかくの全国大会に出られないなんて」

「え？」

「だって靱帯切ったって聞いたけど…」

「…でも…リハビリすればちゃんと膝も曲がるようになるって、手術した先生が」

「…夏までに完治は…無理だと思う、私も」

「!？」

蘭はうつむいた。

血の滲むような努力で勝ち取った関東大会の一位。

ずっと憧れてた全国大会。

(そんな…)

「…毛利、これで足一本失くした訳じゃないから…諦めないで…ね？」

「…はい…」

事実を知った蘭は、数美が帰った後の静まり返った病室で声を出さずに泣いた。

夕方の空は綺麗な黄金色に染まっていた…。

### 第03話 目の前は（後書き）

（後書きトーク・・）ノNo・02

どうもこんにちわ。星です！

お世話様です。

今回は予算の都合上、ゲストをお呼びすることが出来ませんでした  
∴。（一同爆笑）

私も特に喋る事がないので、どうでもいい話しまーす。

私の今日の気分はイエローです。

うん、イメージカラーの話。

天気がいいと気分もいいですねー？

こんな日は昼寝がしたくなりますね。

では、感想待ってまーす！

## 第04話 退院、そして

2週間後：

蘭はめでたく退院。

松葉杖ならば、自分の足で歩けるほど回復した。

「では週に一回ほどリハビリを受けに来て下さいね」

看護師さんの言葉に、蘭は笑顔で答える。

「…はい！」

蘭は手術を担当した先生の話に、手術の経過はとても良好だと聞かされた。

全国大会出場を逃し、しばらく立ち直れなかった蘭にとっては何よりの朗報だった。

「退院おめでとう、蘭」

レンタカーで迎えに来た小五郎が蘭に話し掛けた。

「今夜はご馳走だな！」

「…誰が作るのよ？」

「お前に決まってるだろ！」

「松葉杖の娘に家事をやらそうなんて…又ケサクの考えそうなことだわ」

そう言ったのは蘭の母親である、妃英理だった。

「あっ！」

「えっ、英理！？お前なんでここに！？」

「当然でしょ、蘭の一大事だっていうのに…。蘭、安心して？あなたの足が治るまで私、探偵事務所で暮らすから…」

「なにい〜！？」

「お母さん…」

(皆きつと…私が落ち込まないようにしてくれてる…)  
元気を出さねば、と蘭は自宅へ向かう車の中で思った。

「あー、ただいま!」

蘭は久々の家をじつくりと眺める。

それから思い立ったように小五郎に言った。

「お父さん、コナン君は?」

「まだ博士の家じゃねーのか?退院の日、知らせてなかったからな…」

「あら、そんなことだと思って私が博士の家に電話しておいたわ。もうそろそろ帰ってくるんじゃない?」

「…たく、勝手なことを…」

「ちよっとお父さん!」

こんな二人の痴話喧嘩も、蘭は嬉しく思う。

二人ともあれこれ言いつつ、ほのかに顔を赤らめていることを蘭は知っていたからだ。

「おーい、蘭君!」

博士と哀だった。コナンを送りに来た様子だった。

「阿笠博士!どーもすみませんわざわざ…お世話になりました」

「いやいやいいんじゃないよ。コナン君が帰りたくないと言いきるもんじゃから…」

「え？」

蘭はコナンに目をやる。

コナンは蘭の視線に気が付くと博士の後ろにこそこそと隠れた。

「…コナン君？どうして帰りたくなかったの？」

「…それは…」

コナンは自分の足元を睨みつける。

（そういえばコナン君…手術の翌日の一回しかお見舞い来てくれなかったのよね…）

蘭は寂しそうな顔で問いかける。

「…もしかして私のこと嫌いになっ…」

「江戸川君、博士の新作ゲームにはまっちゃったのよ」

哀は蘭の言葉を遮って言った。

「博士のパソコンでしか使えないゲームでね。だから帰りたくなっちゃったみたいよ」

蘭はコナンに向き直す。

「そうだったの？」

「あ……うん」

コナンは少し疑問な顔付きで返事をした。

「でもゲームはもうだーめ！わかった？」

「…うん」

コナンは相変わらずうつむきながら返事をする。

「蘭、そろそろ入んなさい！」

英理が蘭を呼んだ。

「はい！ほら、コナン君いこ？」

蘭は空いている右手をコナンに差し出す。

「…」

コナンは静かに頷いて蘭の手をそっと握った。

米花総合病院

「ゆっくりでいいからちゃんと呼吸して…」

本日、蘭は病院にリハビリを受けに来ていた。

「プハツ。…ああ、全然思い通りに動かない」

「そんなことないわ。こないだより動くようになってきた」

看護師さんはチェックをしながら話し掛ける。

「本当ですか？」

「ええ。それに今はふくらはぎも大腿筋も筋力が落ちているから…」

「そうなんです。左右の太さ違ってて」

蘭は機械で足を曲げながら言う。

「大丈夫よ。そのうちもとに戻るから…そしたら違和感なくなるからね」

「はい」

ギツギツ…と機械の音がリハビリ室に響く。

そこへ蘭の手術を担当した先生がやって来た。

「ほう、もう大分順調のようだね」

「先生」

「そうだね…そろそろ練習を始めてもいいかもしれないね」

「え…本当ですか!？」

「ああ、ただし慎重にだよ。最初は15分から30分程度にね」

「はい…はい…有難うございます!！」

やっと空手が出来る…。

蘭は嬉しくてしょうがなかった。

（よかった…全国大会には出られないけど…空手は続けられるのね  
！）

蘭はいつもより急ぎ足で家へと向かった。

## 第05話 再び

毛利邸

「え！？もう練習しても平気なの？」

リハビリから帰った蘭はコナンに先生の言葉を報告した。

「うん！私、明日から部活出るからね！」

蘭は右手でブイサインを作る。

「そうなんだ…よかった！でも無理しないでね？」

コナンは心配そうに念を押す。

「分かってるわよ。心配しないで！」

そう言つて、蘭は鼻歌まじりに自分の部屋へと向かう。

コナンも少し気持ちが楽になり、久々に蘭を愛おしそうに見つめた。

帝丹高校

「蘭！聞いたよ。今日からやれるんでしょ？」

話し掛けて来たのは蘭の親友である鈴木園子だった。

「ありがと園子…園子の励ましがなかったら私…」

「なーに言ってるの！【工藤君の励まし】の間違いでしょ！」

「はあ！？そんなわけないでしょ！」

「あらあらごめんなさいね、心の中を読んじゃったみたいで」  
園子は手を口に当てて、楽しそうに笑う。

「本当に違うよ！怪我してから新一と電話してないし…」

蘭の笑顔は途端に寂しそうになった。

「え？どーして？こないだ電番聞いたって…」

園子も少し真剣な顔付きになる。

「そうなんだけど。最近つながらないし、向こうからもちっともかかってこないし」

「蘭…」

すると蘭はフツと笑い直して言った。

「なーんて！別にあいつ忙しいから私の心配させるつもりないし、寂しくもないしね！」

「…全く工藤君ったら、こんな健気な妻を残してどこ行ってんだか」  
「ちよつと、妻ってなによー！！」

昼休み、蘭達の楽しげな会話が教室内に響いていた。

## 放課後

蘭は待ちに待った部活へ直行した。

「それじゃー、ペアになって練習始めて」  
「押忍！」

部長代理の数美が仕切る。

「毛利は私と。まずは軽くな」

「はい」

ダンッ　ダン！

床を強く踏む音が体育館に轟く。

「拳もつと甘く！カんでるよ！」

「はい！」

数美は蘭に指摘をしながら突きを払っていく。

（隙有り！）

蘭は得意の回し蹴りを繰り出す。

しかし、同時に蘭の左膝に激痛が走った。

「……！！！」

「よし！いいぞ毛……」

ドサッ

蘭はその場に倒れこんだ。

膝を押さえ痛がる。

「……！毛利！？」

数美が駆け寄る。

「ど、どつした？」

他の部員達も心配して寄って来た。

「同じところね…左膝の…救急車呼んで！」

こうして蘭は再び病院へ運ばれた。

一方コナンは下校途中だった。

サッカーボールを蹴りながら、哀と並んで歩いている。

その時コナンの携帯がブルった。

「えーと…こっちはコナンか」

コナンは着信している携帯を確かめながらボタンを押した。

「もしもし？」

「…コナン、お前学校は終わったのか？」

相手は小五郎だった。

「うん、今帰ってるところだよ！」

子供っぽく返事をしながらコナンは思った。

小五郎からの電話…なんて珍しいんだ、と。

「今から杯戸中央病院に来られるか？」

「え…うん。博士に迎えに来てもらえれば」

「…じゃあ今すぐ来てもらえ」

「う、うん」

コナンの心臓の鼓動は高まる。

そうでないことを祈りながら小五郎に聞いた。

「…どうして？」

「…蘭が…再手術なんだ…」

「…！」

コナンは思わず携帯を落としそうになるほど動揺した。

しかしコナンのわずかに冷静な心理が一つの疑問に辿り着く。

杯戸中央病院…？

「ねえおじさん、蘭姉ちゃんの病院って米花総合だよね？」

「こつちに着いたら説明してやるから」

「…わかった…」

コナンは小五郎との電話を切り、博士の自宅に電話をかける。

「何かあったの？」

その横で哀が心配そうに聞いた。

「…ああ」

これがコナンの今の精一杯の返事だった。

間もなく博士のビートルが到着し、コナンは杯戸中央病院へ向かった。

## 第05話 再び（後書き）

（後書きトーク・ ・）ノNo.03

星「今日のゲストは灰原哀ちゃんです」

灰原「…どうも」

星「哀ちゃんには化学について詳しくそうなので、SF映画についてお聞きします」

灰原「…私、SF映画とかあまり知らないんだけど」

星「えーと、じゃーポ モンについてどう思いますか？」

灰原「…そうね。子供に夢を与えるにはミステリアスな部分が多いんじゃない？それに人体の抵抗値は約400〜2000オームと言われるのに100万ボルトの電圧で攻撃されてピンピンしてるあの登場人物ははつきり言っておかしいわよね？あと…」

星「はいはいはい！！以上灰原哀ちゃんでしたー！！」

灰原「感想、よろしくね」

## 第06話 罪悪感

杯戸中央病院

コナンと博士は到着すると、すぐに手術室前へ向かった。

「おじさん！」

「コナン…それに博士も」

小五郎は組んでいた腕を崩し、顔をあげた。

「蘭君は…大丈夫なのか？」

「…無理をするとまれに繋いだ靭帯が再び切れてしまうことがある  
それで」

「そんな…治りが早いと喜んでいた矢先に…なんてことじゃ  
博士も落胆する。」

「それでおじさん…なんでその手術がこの病院なの？」

「ああ…それがな」

小五郎は咳払いをしてから話した。

「前の蘭の手術を担当した先生が…今、弟子と一緒に海外の病院に  
行ってるそうなんだ。靭帯を繋ぐ再手術は成功率が低いらしくて、  
米花総合の若いドクターよりもこっちの有能なドクターにオペを頼  
んだ方がいって事でやむを得ず…」

「…」

コナン達は、蘭を信じて待つことしか出来なかった。

こんなにも不運が重なってしまった蘭を、ただ待つことしか…。

2日後

「…」

蘭が目を開けると、そこには小五郎や英理、看護師たちが蘭を覗き込んでいた。

「…蘭！」

「お母さん…」

「蘭ったら、手術が終わってから丸一日寝てたのよ！もう…心配したんだから！」

その言葉に蘭はごめんなさいと呟く。

「手術は成功ですつて。今度は無理しちゃ駄目よ、蘭」

「…ほんとに…急がば回れよね。しっかり治してそれから！」

「よく言っただぞ、蘭」

小五郎もホツとした様子だった。

「…でももう入院は飽き飽きよ！ベッドの上は退屈だし」とすると看護師が蘭の足の状態を診ながら言った。

「あら、そんなことないわ。これだけ元気なら、もう明日か…明後日にはリハビリを始めても平気よ」

「えっ？」

看護師さんの言葉に蘭は戸惑いを隠せなかった。

それに気がついた看護師が言う。

「今度はリハビリには専門のトレーナーさんが付き添うからのびのびとやって頂戴ね」

それを聞いた蘭はいつものように明るく返事をした。

「…はい、頑張ります！」

一方コナンは阿笠博士の家だった。

蘭の手術の結果は知っているが、やはり罪悪感がコナンを苦しめる。

「なあ博士…蘭のやつ、来年の関東大会に間に合うと思うか？」

コナンはボーッとテレビを見ながら話しかける。

「大丈夫じゃろう。…あの子は強い子じゃ。きっとこの試練を乗り越えるじゃろ」

「強いつたって…限界があるだろ…」

その時灰原がコナンにコーヒーを差し出して言った。

「そうね…だからその彼女には必要なんじゃない？あなたの声…」  
コナンは無言でコーヒーを受け取る。

そして一口すすったあと言った。

「…なんて声掛けたらいいんだよ？蘭の体をあそこまで拗らした張本人はオレなんだぞ！」

「そんな…あなたは江戸川コナンだけでなく…工藤新一でもあるんだから…」

哀がたじたじとしているのもおかまいなしにコナンが怒鳴る。

「だったらそれだって同じことじゃねーか！！」

コナンはやっと少し落ち着いて、コーヒーをテーブルに置く。

そして静かに言った。

「…手を伸ばせば触れる距離なのに…届かねーんだ…ちっとも…」

哀と博士はコナンに掛ける言葉がなかった。

ただうつむいたコナンの小さく震える背中を見て悟った。

黒の組織に体を小さくされたことと言い、

蘭の靱帯の罪悪感と言い、

コナンの精神状態は今、限界に近いのだと。

## 第07話 心の乱れ（前書き）

お願い

今回からコナンに新一のなごりがなくなってきました…（・・・）  
でもそういう展開なので文句は受け付けられません。  
御了承下さい。

星でした。

## 第07話 心の乱れ

杯戸中央病院

「……え？コナン君が…？」

蘭は病院内の公衆電話で小五郎に電話を掛けているところだった。

『ああ…食べた物を戻しちまってな…』

「あら…胃の風邪かしら？」

『…オレもそうだと思って、さつき新出先生のところに連れてったんだ。そしたら…』

新出診療所

「コナン君ですが…体にこれといった異常はありませんでした…」  
新出先生はカルテを眺めながら話す。

「え？…マジっすか？」

「ええ。けど心配なのもっと大きな病院で診てみたほうがいいです  
ね…」

「はあ…」

『…ってわけなんだよ』

「そ、そう…それでいつ行くの？」

『まあ、お前は自分の治療に専念しろ！こっちのことは任せて！』

「ちょっと…！そんなこと聞いたら心配になっちゃっうじゃ…」  
「ツーツーツー…。」

蘭が言い終わらないうちに小五郎との電話は切れてしまった。

「もーっ！」

蘭は病室に戻る途中に考え込んでいた。

(コナン君ったら…ちっともお見舞いに来てくれないじゃない)  
ちらりと自分の松葉杖を見る蘭。

(…やっぱりあのこと気にしてるから？)

足のことは、ショックでない…と言えばもちろん嘘になる。

全国大会に出られないと知った時は涙を流したほどだ。

しかし、それで苦しむ人がいるのなら話は別だ。

コナンがそのことで悩んでいるのが、蘭にとっては辛い。

(あたしが…コナン君を…罪悪感で縛り付けている…？)

蘭は空手のためと同時にコナンのためにも早く足を治そう、と決心した。

## 1週間後

蘭の二度目の退院の日がやって来た。

「おめでとぅ、蘭」

英理が言った。

その言葉に対して蘭は言う。

「もう二度目になるとおめでたくもないわよ！」

「ふふ…その通りね」

そして小五郎が蘭に聞く。

「それで？今後のリハビリはどっちの病院でやるんだ？」

「米花総合病院にするわ！この前の先生に色々と聞きたいこともあるし…」

「そうか。まあ二度目だから治りは遅いだろうが、慌てんじゃねー

ぞ…」

小五郎が照れながらも励ましてくれているのが分かり、蘭は嬉しくなっていた。

「ありがとうお父さん！」

そして英理の車で、蘭たちは病院を後にした。

## 毛利邸

「…あ、お帰り蘭姉ちゃん」

コナンが蘭を出迎えた。

「…」

しかし蘭は言葉を失ってしまった。

(コナン君痩せた…というよりやつれた…?)

そしてコナンの笑顔は必死さを感じさせられる。

「コナン君、起きてて大丈夫？」

英理がコナンに問いかける。

「…うん。ちよつと楽になったから…」

そして話に着いていけない蘭に小五郎が耳打ちをする。

「蘭…後で話すから」

「…」

蘭は小さく頷いた。

## その夜

蘭は英理と小五郎にコナンの話を聞いていた。

「せつ…摂食障害!？」

蘭は思わず声を張り上げる。

「ああ…症状はな」

「…どういう意味？」

そこで英理が割り込む。

「一昨日、阿笠博士に頼んで東都医大に連れて行ってもらったのよ。

ほら、あそこは内科に有能な先生がいるから」

「そ…れで？」

「…やっぱり体の方は正常で、コナン君の体調不良は心理的ストレ

スの表れだつて…カウンセリングを受けることを勧められたわ」

「…心理的ストレス…？」

「ええ…。でも蘭、今はあなたも大変な時なんだから…コナン君のことはあまり心配しないで、ね？」

「…」

（やっぱり私のこと？コナン君…）

蘭はコナンが気になって、その晩はなかなか寝付くことが出来なかった。

## 第08話 蟻地獄

今日は小五郎は依頼人の家に、英理は法律事務所に出掛けていた。

「コナン君、今日はあたしがおいしいクッキー焼いてあげる!」

蘭はエプロンを装着しながらコナンに話す。

「ホント? えへへ…ありがとう」

コナンは蘭と目を合わせようとしなかった。

「食べてくれるよね?」

蘭はしゃがめないため、背中を折ってコナンに視線を合わせている。

「…もちろん」

コナンはそう言うとのろのろとキッチンを出て行った。

その後ろ姿を、蘭は寂しそうにみつめた。

### 2時間後

「コナン君! 焼けたよ、クッキー」

蘭はコナンを座らせ皿に並べたクッキーを差し出す。

コナンは一枚手に取ってかじった。

そして顔を上げて呟く。

「…あ…おいしい」

その言葉に蘭はにっこり笑って言った。

「ホント? まだまだあるからね!」

そして蘭もクツキーを頬張る。

コナンもゆっくりと二口目をかじった。

「それでさ…コナン君、私今日はコナン君に話したいことが…」

蘭がそこまで言うのとコナンが突然立ち上がった。

右手で口を押さえ、食べかけのクツキーは床に落ちてしまっている。

「…ごめ…おいしいのに…」

「あ、気持ち悪くなっちゃった…?」

のんびりコナンと話す予定だった時間が、なんとも慌しくなってしまうた。

夕方

「おーい蘭、腹減ったぞー…」

小五郎が帰宅した。

するとリビングにはベソをかいている蘭がいた。

「お父さん…どうしよう?」

小五郎は訳が分からず慌てて聞いた。

「おい、なんだなんだ?何があつた?」

「コナン君さつき…また吐いちゃって…それもクツキーを二口よ?

二枚じゃなくてたつたの二口…!」

「お、落ち着け。蘭」

小五郎は蘭の両肩をゆすりながら言った。

そして少し黙った後言った。

「明日、博士にコナンの親に電話をしてもらえるよう頼むから……」  
んな時に両親の声も聞けないんじゃないやあんまりだからな……」

「……」

「お前も明日はリハビリの日だろ？今日はもう休め……」  
蘭は静かに頷いて自分の部屋へ戻って行った。

## 阿笠邸

「それじゃーよろしく頼みますよ！コイツと電話の件……」

「ああ。まあ海外じゃから繋がるか分からんがのー……」

博士はため息をつきながらコナンと哀のもとへ戻ってくる。

「……新一君、何か飲むか？」

博士は出来るだけ優しい口調でコナンに話し掛ける。

「いや……」

## ピンポーン

呼び鈴が鳴った。

博士は小走りで玄関へ向かう。

「……ねえ、ちゃんと食べてるの？」

二人きりになると、哀がコナンに聞く。

コナンは顔を背けながら言った。

「…今朝は少し…」  
「…」

空気がしんみりとしてしまったその時だった。

「よっ！工藤！！元気しとったか？」

そう言ったのは大阪に住む高校生の服部平次だった。

どうやら来たのは今の今らしい。

平次はなんとも明るくコナンの横に座る。

「聞いたんのか！」

平次は無理矢理コナンの顔をねじり、視線を合わせさせる。  
すると一瞬のうちに平次から笑顔が消えた。

「…」

「服…部？」

コナンの小さな声でハツとした平次は途切れ途切れにこう言った。

「…な、なんや…工藤。お前ちよい…痩せたん…ちやうか？」

コナンは平次と目を逸らして言った。

「それより…なんでここに…？」

「あ、ああ…それはな」

平次はちらつと阿笠博士の顔を見る。

そしてコナンの方を向き直して言った。

「たまには大阪に來いや！このままやと年が明けてまうで！」

「…パス…」

平次は深刻な顔付きになる。

いつもならコナンにつっこむ所だが、今はコナンに冗談が通じないと察したらしい。

「…ホンマはな、じいさんに聞いてんねん。あの姉ちゃんのこと…」

「…！」

コナンは顔をあげて平次に言った。

「服部…オレ…」

「…ああ」

「知ってたんだ…蘭が…空手にどれだけ打ち込んで来たか…」  
コナンの視線がだんだん下がっていく。

平次はただ黙って聞いている。

「蘭があんな状態なのに…迷惑ばかり掛けてて」

「工藤…」

平次はちよつと焦りながら言った。

「…な、治るで！姉ちゃんの足は絶対治るから…せやから…」  
そして平次は自分の帽子をコナンの頭に被せて言った。

「あんま…思いつめるんやないぞ…？」

「…」

コナンは思った。

自分が落ち込んでいることはこんなにも色々な人に心配を掛けてしまうのだと。

しかし、早く立ち直らないと…もっと頑張らないと…と考えれば考えるほど出口は遠く感じる。

まるで蟻地獄のように…。

## 第09話 どうして…

ただ霧が曇っているだけの真っ白な世界。  
今、蘭はそこにいた。

「…ここは…？」

歩いてても歩いてても変わらぬ景色。

そこに見つけたのは最近見慣れなくなった光景。

「…！新一！？」

蘭は走る。

少しずつ新一に近づく。

しかしある異変に気付いてその足を止めた。

「新一…何を…？」

新一の手に握られた拳銃が、蘭の目にはっきりと映った。

新一は小さな声で言った。

「…悪かったな…蘭…」

そして銃口をこめかみに近づける。

「やだ…新一…何言ってるのか全然分かんないよ…！…」

蘭は涙ながらに新一を止めようとする。

しかしそれと同時に新一はゆっくり引き金を引こうとしていた。

「いや…いや…いやああっ！…！」

蘭は思わず飛び起きる。

まだ朝日が眩い時間だった。

蘭は息を切らせながら自分の部屋を見渡す。

「…夢…だよ…？」

そして蘭は胸を撫で下ろした。

その時部屋のドアが開いた。

「…蘭姉ちゃん？」

コナンがひよっこり顔を出していた。

「…あ、ごめんねコナン君…起こしちゃった？」

「ううん。トイレに行きたくなっただけだから…」

「そう…」

そしてコナンがドアを閉めると蘭の顔は青ざめる。

(…なんていやな夢…)

そして額に手を当ててフツと笑った。

(疲れてるのね…私…この頃色んなことがあり過ぎて)

蘭は台所に向かいながら眩いた。

「…今日からまた部活なんだから…早く遅れを取り戻さなくちゃ…」

放課後

「現場復帰だな、毛利」

数美は蘭が部活に顔を出して真っ先に声を掛けた。

「ありがとうございます。また頑張ります！」

「ええ、無理しないでね…」

そう言った数美は他の後輩のもとへと行ってしまった。

“無理をしない”

これからしばらくはこの事を意識してやる、と蘭は心に決めていた。

20分後

(…やっぱりまだ左膝にダメージがあるのかしら…)

蘭は膝を曲げた時のかすかな痛みのため、休憩していた。

(…先生が最初は軽く15分程度にとおっしゃってたし…今日はもうあがるう)

蘭は数美にそのことを伝え、帰路についた。

(次に病院に行ったら聞いてみないと)

蘭は帰り道にそう考えていた。

この時も、蘭の足は小さな痛みがあった…。

3日後・米花総合病院

「大分膝も伸びるようになってきたわね…」  
看護師さんが言った。

「本当ですか」

蘭は微笑みながら機械を動かす。

しかし途中で止めて起き上がってこう言った。

「あの、実はこの前から痛めた左膝のほう…曲げると痛むんです」

「え？それは…あなたまた無理をして…ない？」

「いえ…基礎練を20分程度ですし」

「基礎練…？よく分からないけど20分程度ならねえ」

「まさか…手術失敗…？」

看護師は首を振って答えた。

「それわないわ！失敗していたら歩く事も出来ないはずだから…」

「で、ですよね。よかった！こないだはすごく腫れちゃったから心

配になっちゃって」

「腫れた…？」

「ええ。でも一日冷やしたら治ったんです。やっぱり気にしすぎで

すかね？私…」

「…」

看護師さんはしばらく黙ってから言った。

「もっと早く言ってくれれば…あ、でもこっちに来た時にはもう遅

かったのね…」

「…え？遅いって…何が！？」

「いえ、ね。…一度よく…確認してみましよう…」

「せ、先生…！！」

蘭の前にはたちまち霧が曇っていくようだった。

晴れかけていた霧が、この前の夢のように。

## 第10話 背中合わせ

「あああああ……!!」

蘭の部屋からは悲鳴に近い鳴き声が聞こえていた。

「お、おい英理!!あれは蘭の声か……!?!」

小五郎が焦りながら英理に聞く。

「……」

英理は頭を抱え込み黙っていた。

コナンも気まずそうに英理をみつめる。

英理はようやく重たい口を開いた。

「……蘭……もう一度手術を……それも今すぐには出来ないのよ……」

「!?!」

コナンは驚いて声が出なかったが、小五郎はすぐに声を張り上げる。

「なんだって!?!……どういふことなんだ!?!」

英理は涙ぐんだ顔を上げ、静かに言った。

「……手術した左膝に異物があるらしくて……」

「……い……異物?」

コナンも小五郎と一緒に聞いて聞く。

「ええ……それが骨片とか大きなものだったらすぐにレントゲンに写つたらしいんだけど……。あの子の場合、手術の時に出た繊維のようなかすかなものなんですって……」

英理は視線を下げて続ける。

「……それでも関節に挟まって……炎症を起こしてしまうそうなのよ……」。

手術後の一週間くらいまでなら薬でなんとか出来たそうんだけど……」

「手術後一週間って……丁度蘭姉ちゃんが退院した頃……だよな」

コナンが眉間にしわを寄せながら言った。

「そう。大事な時に転院してた…」

そしてしばらくの沈黙の後、小五郎が言った。

「でもそれは…杯戸中央病院の手術ミス…だよな？」

しかし英理はため息をついてから答える。

「それが…はたして異物が入ったのが杯戸中央病院での手術なのか、米花総合病院でなのか特定出来ないそうなの」

「…そんな…でっ、でも！異物なら手術で取り出せるんじゃないか？」

小五郎は必死に聞いている。

「だから言ったでしょう。すぐには手術が出来ないって…。あの子、もう二度も同じ場所を切っているの」

コナンは背筋がゾクツとした。

小五郎も青い顔で英理を見ている。

「お医者様の話によると…最低でも半年は待たないといけないって言うのよ」

「半年…か。でも出来るんじゃないか！あんなに泣いてるからもう駄目なのかと思ったよ…」

小五郎は少しホツとした様子だった。

しかしコナンが震えた小さな声で聞く。

「…じゃあ蘭姉ちゃん…もしかしてもう…？」

「そうなのよ…コナン君…」

「へ？」

小五郎が分かってないと察した英理は言った。

「手術までに半年！その上り八ビリ期間も入れたら…どうなると思うの！？」

「…ど…どうなるって…？」

そこにコナンが割り込む。

「…おじさん…蘭姉ちゃんはもう…高校生活で空手をやれない…」

「な…!?!」

小五郎はその場に座り込んだ。  
そして机を思いつきり殴る。

「…くそっ!?!?!」

「あなた!」

「…」

コナンはその光景と蘭の鳴き声で事の重大さを骨の髄まで思い知ら  
されてしまった。

今までシヨックを人前で見せなかった蘭が、この有り様。

(…蘭…オレ…オレが…)

コナンの目の前は真っ暗だった。

蘭の夢を遠ざけ

蘭の青春を潰し

遂には蘭の笑顔さえも奪ってしまった。

コナンは心が深くに沈んでいくような気がした。

2日後

蘭はあれから学校へ行かなくなってしまった。

コナンも体調が悪いため学校を休んでいる。

しかし、二人きりになっても蘭はコナンと少しも口を聞かず、朝から普段は滅多にやらないゲームを延々とやっていた。

そしてたまたまにフラフラと自分の部屋へ行き、机に突っ伏して泣く。

そんな蘭を見かねて、コナンは蘭が泣く部屋へと入った。

「…蘭姉ちゃん…」

「…」

蘭はそっぽを向いている。

「あ…あのさ…」

「…ってよ…」

蘭が小さく呟く。

聞き取れなかったコナンは聞いた。

「え？」

すると蘭は両手拳に力を入れて怒鳴るように言った。

「…出てってよっ！！」

「…！！」

コナンは蘭の意外な言葉に驚く。

そして次第に目頭が熱くなり蘭の部屋を飛び出した。

ドアを閉めるとコナンの目からは涙がこぼれた。

蘭に嫌われた、そう思えて仕方がなかった。

（バー口…自業自得じゃねーか…）

そう考えて歯を食いしばっても涙は止まらない。

蘭に泣いている事がばれないよう、声を押し殺す。

蘭を傷付けて落ち込んだコナンを支えてくれたのは、紛れもない蘭だったのだ。

そしてその蘭をコナンが励ました事は一度もなかった。

(…蘭…ごめんな…蘭…っ)

コナンは心の中で蘭に謝りながら自分の頬を伝う涙を感じていた。

一方で蘭は片肘を机に突き、額に手を当てて考え込んでいた。  
コナンに言った言葉を後悔していたのだ。

(どうしたの私……どんどん嫌な人間になってく……)

蘭は髪をぐしゃぐしゃと掻き回した。

第10話 背中合わせ（後書き）

（後書きトーク・ ・ ）ノNo.04

皆さんお久し振りです！

最近このコーナーサボりまくりました。笑

その代わりと言っちゃあなんです、小説のほうは大分展開したと思いまーす。

ではここで10話の話。

蘭のちよつときつめな一言…。

蘭なら絶対こんなこと言わないよー。って思ったでしょ？  
だって星だって思いましたもん。

蘭がー！とか打ちながら呟いたり

この蘭の言葉はコナン泣かせるために書きました。（おい）

コナンが泣くと、なんかシリアスになるでしょー！笑  
では感想待ってまーす。

あ、あとランキング参加してまーす。

ポチツと宜しく！

## 第11話 危険な再会

翌日・帝丹小学校

「あ、コナン君に哀ちゃん！おはよう」

コナンと哀が教室に入ると、クラスメートの吉田歩美が元気に挨拶をしてきた。

「…おはよう」

哀は苦笑いで返事をした。

「…」

「あれ、コナン君どうしたの？目の下赤いよ」

歩美の言葉にコナンは戸惑いながら言う。

「…え？ああ…昨日遅くまで本を読んでたからな…」

「そうなんだ！でもちゃんと寝ないとだめだよ…風邪治ったばかりなんでしょ？」

「…ああ…」

コナンは無理矢理話を終わらせて席に着いた。

「コナンの奴、まだ具合悪そうだよなー」

「そうですね…なんかやつれましたよね…」

心配そうに話すのが、同じくクラスメートの小島元太と円谷光彦だった。

「灰原さんも元気ないみたいです」

「まーたあの二人かよ！あいつらデキてんじゃねーの？」

元太はにんまりと笑う。

しかし光彦は元太をキツと睨んで言った。

「笑い事じゃありませんよ！」

「あ…わ」

キーンコーンカーンコーン…

元太が何か言いかけたところでチャイムが鳴った。すると1 - Bの担任の小林先生が立ち上がった言う。「はい、そこ！席に着いて。授業始めますよ！」

小林先生の声で元太と光彦はしぶしぶ自席に戻った。

## 放課後

「…ねえ円谷君、江戸川君は？」

哀は玄関で光彦に聞いた。

いつもの帰りのメンバーに、一人欠けている事に気付いたからだ。

「それが…先に帰っちゃったみたいで」

「えーっ！コナン君帰っちゃったの〜!？」

歩美が光彦の言葉を聞いて残念そうに言った。

「仕方ないわ。彼…今ちよつと色々あって。今日は私達だけで帰りますよ？」

哀は靴を履き替えるとさっさと歩いていく。

「あ…ちよつと灰原さん！」

光彦たちは慌てて靴を履き、哀を追いかけていった。

一方でコナンは人気のない路地をうつむきながら歩いていた。  
（帰ったら…またあつちにいけとか…言われんのか…？）  
コナンの足取りは探偵事務所に近づくほど重くなっていく。  
そして探偵事務所の前に着くと、完全に足を止めてしまった。  
「今日は…やっぱ博士の家に…」  
しかしコナンはハツとした。  
前に偶然遭遇したバスジャックのことを思い返す。  
その時哀に向けて言った言葉を。

『灰原：自分の運命から逃げんじゃねーぞ…』

（…オレは逃げているのか？）

コナンは両手をぎゅっと握って探偵事務所を見上げた。

（けどよ…逃げなきゃどうしようもない時だつて…）

そう思つて博士の家に向かおうとした時だった。

「…！」

コナンは誰かに口を塞がれた。

同時に拳銃がコナンのこめかみにしっかりと押し付けられている。

「よおボウズ…久し振りだな」

（…！この声…あの時の！）

コナンに囁く声はまさに杯戸ショッピングモールで逃がしてしまつた犯人だった。

「こんなところで会えるとはな…探偵事務所に一体何の用だ？」

男はくつくつと笑いながら言う。

そして銃口に力を入れてから続けた。

「黙つて車に乗れ…お前をバラすのはもつと離れた場所だ…」

「…」

コナンは従つた方が良いと判断し、静かに車に乗った。

車に乗ると、薬を嗅がされ体が重くなった。

残つた望みは博士か哀が一刻も早くこのことに気付いて、予備の追

跡眼鏡でコナンの探偵バツチを頼りに探しに来てくれることだった。それまで自分が殺されないでいるかどうか……。そんなことを考えているうちにコナンの意識はだんだんと遠のいていった。

## 夜・阿笠邸

「…何じゃと？いや、こつちには来とらんが…ああ…また」  
博士は電話を切って考え込む。

「今の電話、誰から？」

哀が怪しそくに聞いた。

「ああ、毛利君からじゃよ。…哀君、今日も新一君と帰って来たんじやる？し…」

「今日是一緒に帰ってないけど…」

哀は博士の言葉を遮って言った。

そしてだんだん拳動がおかしくなってくる博士に睨みながら続ける。

「…彼に何かあったのね？」

「…」

博士はゆっくりと口を開いた。

「何があったのかはまだ分からんが…新一君が毛利君の家に帰ってないそうじゃ」

「！」

「どーこ行ったんじゃのー…全く」

その時哀は椅子に掛かっていたコートを羽織って言う。

「…博士。予備の追跡眼鏡、充電してあるわよね？」

「え？ああ…それは大丈夫じゃが…哀君、まさか新一を？」

哀は博士を無視して追跡眼鏡の電源を入れた。

「…鳥矢町。夕方にさらわれてこのスピードは…恐らく車よ。間違いないわ。彼は家出なんかじゃない…普通に考えて誘拐したのは顔を見られたあの指名手配犯でしょうね」

「ゆっ…誘拐じゃと!？」

「博士、警察に電話をして。それから車を出して頂戴。急いで此処まで行くわよ」

「じゃが…」

「ぐずぐずしてる時間はないわ！」

哀は冷徹な視線で博士をみつめる。

博士は仕方なしという様子で静かに言った。

「…先に車に乗っていなさい。わしは警察にこのことを電話してから行くから」

「ええ…」

哀は博士から車のキーを受け取り、玄関へ向かった。

(…それからもう一つ…)

## 第12話 窮地での手掛かり

毛利宅

「…蘭は…探偵事務所か…？」

小五郎は英理に聞いた。

「ええ…けど今はそつとしてあげて頂戴」

英理は溜め息をつく。

「…くそ！コナンの奴は一体何処に行つたんだ！こんな時に…」

小五郎は右手にぐつと力を入れる。

沈黙の中、二人は探偵事務所から聞こえる蘭のすすり泣く声に耳を傾けていた。

探偵事務所

「…うっ…うっ…」

蘭はソファアに沈み込み、ひたすら自分の涙を拭っていた。

足のシヨックとコナンへの申し訳なさで、蘭の涙は止まりそうになかった。

ピンポーン…

突然事務所の呼び鈴が鳴った。

「…？」

蘭は不思議そうにドアを見つめる。

なぜなら事務所のドアには今日、このような張り紙があるはずだったからだ。

“本日、臨時休業致します 毛利小五郎”

ピンポーン  
ピンポーン…

しかし呼び鈴は鳴り止まない。

蘭が悪戯かと思いはじめたその時だった。

「蘭さん！江戸川君が大変なの！開けて！！」

「…！哀ちゃん！？」

蘭は声の正体をすぐに見破るとドアへと向かった。

「…」

ドアを開けると眉間にしわを寄せた哀がいた。

「…哀ちゃん…なんで」

「博士が車を出してくれてるから、すぐに支度してくれない？」

哀は蘭が言い終わらないうちに早口で言った。

蘭はまだ状況が理解出来てない様子だった。

それを悟った哀は静かに言う。

「…江戸川君が誘拐されたみたいなの。この眼鏡…予備のなのだけ  
ど、これで彼の所へ行くのよ」

「！？」

蘭の顔はどんどん青ざめていく。

「…！！ゆっ…！？大変っ…お父さんに早く…」

焦って階段を上ろうとした蘭の腕を哀が掴んだ。

「毛利探偵にはもうちょっとしたら警察から連絡いくはずだから  
だから早く」

「……」

蘭は少し黙ってからドアのすぐ横に掛かっていたガウンを羽織った。  
そしてさっきとは見違えるほど強気な瞳で言う。

「…わかった！」

鳥矢町・F倉庫

「…？」

コナンは気が付くと古ぼけた倉庫の中で両手足を縛られていた。

「くそ！」

縄を解こうと足掻いたが、縄はかなりきつく縛られていて、手首や足首に痛みが増すばかりだった。

冷静になって辺りを見回すと、誘拐犯の男達は見当たらなかった。そして異様な匂いがコナンの鼻をつく。

「ガソリン…」

コナンのいるのもう使い古された木造倉庫。

ガソリンに引火したら、あっという間に火が回ってしまっだろう。

(…どこに行ったかは知らねーが…この後ここに放火することは間違いないな…)

そしてコナンは床に積もったほこりの下に、文字が描かれていることに気付いた。

膝立ちをして目を凝らす。

古い床板には荒々しくこう刻んであった。

【 ouenn (office) ni (oku) 】

「…オーコーイーエヌ…オフィス？オフィスは会社または事務所…でもouenなんて会社聞いたこともねーな。それにこの次の…」  
とすると、考えられるのはこれが何かを示す暗号であるということだった。

コナンは焦る気持ちを押さえ込みながら推理する。

（なぜofficeとokkuは括弧の中にある？括弧内と括弧外の文字は別のもの…）

この暗号を犯人が残したものは确实ではない。  
暗号を彫った後は、けして新しくはなかった為だ。

しかし、もし犯人が残した暗号だとしたら、彼らの行き先や強奪した金の在処が解る可能性も充分にあった。

「…！！まさか…」

コナンは何かに閃くと、呟きながら自分の推理を確かめた。

（間違いねえ。これは犯人が残した…）

その時だった。

コナンは銃声のような鋭い音に体をビクつかせたが、それは近所に住む子供が倉庫の入り口で遊んでいる花火か爆竹の音であると気が付き息をついた。

しかし、ホツとしたのもつかの間だった。

少量の火花が、舞っているほこりに引火し小さな炎を作った。

それは床に撒いてあるガソリンによってしだいに大きくなっていく。

「……!!」

コナンが目を丸くさせているうちに、倉庫は火に飲み込まれていった。

第12話 窮地での手掛かり(後書き)

(後書きトーク・)ノNo・05

まずお詫び。

大ッ変遅くなりました!!

ちよつと大会とかテストとか色々忙しかったもので…(おい

最近また時間が出来て、とりあえず更新せねばと無理矢理ピッチで  
展開させました。

暗号も…しょぼ。笑

まあ細かいところは気にせず読みましょう!…ってもう読み終わったの  
か。

私、全然前書きを活用してないですね…。

### 第13話 大事なこと（前書き）

注意

第12話を大幅に書き換えたので読み直してからこっちを読むことをお勧めします。

自分勝手に申し訳ないですが、御了承下さい！

星でした。

### 第13話 大事なこと

火が立ち上る倉庫の周りには、何台ものパトカーが集まった。その中の一台のビートルから、追跡眼鏡を装着している哀が顔を出す。

「間違いないわ、ここよ」

哀は眼鏡越しに倉庫を睨む。

「…うそ…」

哀の声を聞いた蘭も車から飛び出した。

「…コナン君!」

その叫び声は、虚しくも炎の轟音に掻き消されていった。

「蘭君!」

蘭は後を振り向く。

「目暮警部…高木刑事たちも」

蘭は火の明りにハッとし、目暮警部達に詰め寄って言った。

「この中にコナン君がいるんです!早く助けて下さい!」

目暮警部は蘭の肩に手を置き、静かに言った。

「今、消防隊がここへ向かっておる。それまではわしらにはどうす

ることも出来んよ」

「そんな」

蘭はまた振り返り、ただ紅蓮の炎を見つめた。

「…ゴホゴホッ」

一方で、コナンの周りには煙が充満していた。目の前で火が渦を巻いている。

(…くそ…どうしたらいいんだ?)

コナンは必死に考えを巡らせた。

時折フツと意識が遠ざかりそうになる。

しかしコナンは諦めることだけはどうしても嫌だった。

もう、自責の念に怖じ気づいて後退りするコナンではなかった。

(…オレはなんで気付かなかったんだろうな。もっと真っ向に自分と戦うべきだったのよ…)

コナンは視線を上げ、その先にある窓ガラスを見た。

(内側から割ったら…破片は外に飛ぶだろうが、窓は…どうなる) 歯をしっかりと噛み締めたコナンは窓に体当たりをした。

(一か八か!)

バリンと音をあげて割れた窓ガラスの破片は、コナンの予想通り倉庫の外へ落ちていった。

しかし息を荒げながらコナンは満足げに窓ガラスを見る。

淵の方の窓ガラスは、鋭い光を放ち、そこに残っていた。

蘭達は倉庫の外で消防隊の到着を待っていた。

「！…ガラスの破片」

突然、割れて破片が散った窓に皆の視線が集まる。

「…これは…コナン君のSOSなんじゃ…」

阿笠博士の一言に、皆凍りつく。

目暮警部は痺れを切らしたように怒鳴り散らす。

「ええい！！消防車はまだなのか！！！」

慌てて高木刑事が言う。

「あつ…後2分足らずで到着するそうです！」

「…！」

青ざめた蘭が倉庫へ歩み寄ろうとしたが、哀が服の裾を引っ張って止めた。

「そんな無防備な格好で、助かる保障なんて何処にもないわ！…待ちましよう」

「哀ちゃん…」

哀は先程割れた窓に視線を変える。

（工藤君…何をしているの。あなたにはまだやらなきゃいけないことが沢山残っているはずよ…？）

「蘭！」

「お父さん」

一同が呆然としている中、小五郎がレンタカーで駆けつけた。

「ったく、どこ行ったのかと思って心配したたる！！で、コナンは

…」

「…」

蘭はスツと火の中の倉庫を指差した。

「…おいおい、まじかよ…」

小五郎の額を一滴の汗が流れた。

コナンはその割れた窓ガラスに自分の手首を縛っている縄を引っ掛け、思いっ切り引っ張った。

豪快に避けた縄はコナンの手首から外れる。

そして自由になった両手で足の縄も解いた。

「…おーし！これで外に…」

しかし、コナンは立ち上がった瞬間に膝を着いた。

呼吸がどンドン荒くなり、目の前が暗くなる。

（…っ…バーロ…もう少し…）

そしてコナンはその場に倒れた。

コナンの耳にはかすかに消防車のサイレンが聞こえた。

…蘭…

「……………ろ…しっかりするんだ、ボウヤ!!」

「…あ…」

コナンがうつすらと目を開けると、消防隊の一人がが覗き込んでいた。

「もう大丈夫だからな！」

コナンは隊員に抱えられ、外へと向かう。

倉庫から出ると、多くの歓声があがった。

倉庫の消火も始まっている。

そして、コナンの耳には誰かが呼んだ自分の名前がはっきりと聞こえた。

「コナン君！」

「…ら…ん…」

コナンはその声の主が自分に駆け寄ってくるのが見えた。

「…コナン君…よかった無事で…でもどうして縛られてなかったのに出てこなかったのよ…」

蘭は涙を浮かべながらコナンに聞いた。

「…違うんだ…蘭姉ちゃん…これっ…ボクが窓割って…自分で縛られ…てたの…切ったから…死ぬわけにはいかなかったから…どうしても…」

コナンは途切れ途切れになりながらも一生懸命話した。

蘭はそれを黙って聞いた。

「…ボク…蘭姉ちゃんに、言いたくて…今までずっと…大事なこと…忘れてて…あのね…」

蘭は小さく頷いた。

「…なーに？」

「蘭姉ちゃん…」

コナンは微笑んで言う。

「……あの時……助けてくれて……ありがとう……」

「…コナ…ン…君…」

蘭の瞳に浮かんでいた涙は一気にこぼれ落ちた。

コナンは念のために救急車で病院へ運ばれることになった。  
その車の後姿を見つめながら、蘭は小五郎に言った。

「お父さん…私、もう一度空手…やりたいの」

「蘭…」

蘭は小五郎のほうに向き直して笑う。

「私、再々手術を受ける」

小五郎は最初は驚いた顔をしていたが、フツと笑うと頷いてこう言  
った。

「…それでこそお前だ！」

第13話 大事なこと(後書き)

(後書きトーク・・)ノNo.06

おー疲れた!

結局平次はやめました…でも次出てくるよ!

あと暗号の答えも

さてはて、次回は最終回になる予定です)(ノ

あと一息!頑張りますっ!!

## 最終話 明日へ

『具合はどうじゃ？新一君』  
博士からの電話だった。

「ああ、もう平気だよ」

『しかし心配じゃのー…誘拐犯はまだ捕まっておらんのじゃろ？』

「心配すんなって！それならきつと…」

「おーい、コナン！」

上の自宅から小五郎の呼び声が聞こえた。

「あつ、おっちゃんが呼んでる。じゃあな博士！」

コナンはがしゃんと電話を切って階段を上がっていった。

「何？おじさん」

「何？じゃねえ！危ねーから、犯人が捕まるまでは大人しくしてろ」

「…」

コナンは顎の下に手を当てて考え込む。

蘭が首を傾げて聞いた。

「コナン君？どうしたの？」

「ねえ、蘭姉ちゃん。実は…倉庫の床に、2億円の在処を示す暗号が彫ってあったんだ」

「…！！」

蘭と小五郎は同時に目を丸くした。

「…なんてあったんだ!？」

小五郎が身を乗り出して聞く。

「【ouen(office)nikoku】。こねってきつと、ループだよな？」

「どついつことなの？」

蘭は不思議そうにしていた。

「タネが解れば簡単さ！ループ…つまり繰り返して読むんだ。括弧の中は別にして考えると…」

コナンは自分の手帳に文字を書き始め、蘭達に見せる。

「ローマ字にして読んでみてよ」

コナンの手にしている手帳にはこう書かれていた。

【 ouennouen office niniooku 】

「おうえのうえんおふいすにおく…そっか！【おうえ農園事務所に2億】ね！」

蘭は自分の拳をぼんと叩いた。

しかし小五郎は手帳を睨みながら呟く。

「けどなあ…おうえなんて農園、あつたけかあ？」

それに対して、コナンは横から顔を覗かせて言った。

「おうえって、漢字はどうやって書くの？」

「そりゃー…尾っぽの【尾】に上下の【上】で…いや、もしかしたら【お植え】か…」

「へえ〜！もし尾上って書くんなら、おがみとも読めるね！！」

コナンはあどけなく笑う。

「それなら、おのうえ尾上とも読めるし…」

「おいおい…おのうえ尾上農園っていったら、お前が怪我した頃に農薬とか化学肥料で問題になった…」

「えっ？」

（じゃあ…強盗の目的は…！俺の推理が正しければ…犯人はその農園の人間か、農園に大きく関わっている人間だ！）

コナンは目つきを尖らせる。

「兎に角、目暮警部に連絡だ」

小五郎は電話に手を伸ばした。

翌日

強殺犯及び誘拐犯はめでたく逮捕された。  
容疑者の男二人は意外にものん気に本社で働いていたが、警察の顔を見るなり顔色を変えて発狂したのですぐにお縄になった。  
強奪した2億円も無事に事務所の床下から見つかり、札番号も一致した。

どうやら時効が明けたら手を付けるつもりだったらしい。

「よかったね！犯人捕まって」

蘭はコナンに微笑む。

「う…うん！」

コナンは蘭と目を合わさずに言った。

「あ、そうだ。私も大事なことを忘れてた！」

「え？」

「コナン君…」

蘭は背中を曲げてコナンの目線に合わせる。

「ごめんね、あの時怒鳴っちゃって」

「蘭…」

コナンはフツと顔を上げた。

「ボクも…ごめんなさい」

自然と言葉が出た。

「じゃあ、はい！仲直りの握手」

蘭はコナンに手を差し伸べる。  
コナンはにっこり笑ってその手を取った。

## 2ヶ月後

「蘭ちゃ〜ん！元氣してはる？」

「様子見に来たで〜」

毛利探偵事務所には威勢の良い大阪弁が響いた。

「和葉ちゃん！服部君も…どうしたの？」

蘭が驚きながらも嬉しそうに聞いた。

「どうしたのって…蘭ちゃんが手術受けられるって聞いて、平次と飛んで来たんよ！」

「せや！予定よりうんと早う受けられるんやろ？」

平次が身を乗り出して言う。

「そうなの。傷口の状態がすごく良いみたいで！」

その時事務所のドアが開いた。

「ただいまー！」

帰ってきたのは博士の家に掛けていたコナンだった。

「あれ？平次兄ちゃんに和葉姉ちゃん」

コナンはきょとんとして聞く。

「久し振りやな〜コナン君」

そう言う和葉の横で、平次は冷や汗をかいてぎこちなく言った。

「お、お…う。元氣しとっ…たか？」

「うん！あ、そうだこれ…おじさん！」

コナンは手にしていた紙袋を持って小五郎のもとへ走った。

紙袋の中は、博士からの預かり物なのだろう。

「コナン君も…元気になってよかった」

蘭がコナンの後姿を微笑ましく見つめる。

「さよか…」

(オレにはまだ…ホンマの元気には見えへんけどな…)

平次もそんなことを思いながら、コナンを見つめた。

「それでいつなん？手術…」

和葉が蘭に聞いた。

「それが…もう今日から一晩入院して、明日なの。手術」

蘭は申し訳なさそうに言った。

「えー！ほんならえらい大変な時に来てしもたんやな、あたしら！

ごめんな、蘭ちゃん」

「いいのいいの！逆に嬉しかったよ？」

そう言っつて首を振る蘭に、小五郎が言った。

「蘭、そろそろ行くぞ」

「蘭ちゃん、いつてらっしやい！またな！」

和葉は蘭の両手をぎゅっと握った。

「うん…！」

「ボウズはどないするん？」

平次が蘭に聞いた。

「後で博士の家に行くように言っつてあるから、大丈夫よ」

そう言っつて蘭は外へ向かおうとした。

「蘭姉ちゃん」

すると、後からコナンの声に呼び止められた。

蘭は静かに振り向く。

「蘭姉ちゃん…頑張っつてね…！」

コナンは目一杯の笑顔でそう言った。

それに対し、蘭も目一杯の笑顔で答えた。

「…ありがとう!!」

その様子を眺めていた平次はフツと笑って、小さく言った。  
「…いや、もう…大丈夫みたいやな…」

果てなく続く道を行く僕ら  
向かい風の時も嵐の夜も  
僕らのことを何かが呼ぶから  
まだ見ぬ明日へと走って行くよ

明日へ / 作詞：富岡 博志

END

最終話 明日へ（後書き）

（後書きトーク・ ・ ）ノNo・07

暗号、無理矢理。

あたしが馬鹿だから。

犯人逮捕、無理矢理。

証拠とか色々考えるの面倒だったから。

平次達の登場、無理矢理。

平次に「オレにはまだ、ホンマの元気には見えへんけどな」って言うて（思っ）ほしかったから。

もうわけわからん！

で、調子にのっでおまけまで書きました。

いやあ〜新〜生きてるの？って感じだったので。  
では！

## おまけ

### 2週間後・夜

蘭の携帯が鳴った。

「もしもし?」

『よお…蘭。オレだ』

その声は優しく、思わず頼りたくなってしまう大好きな声。そしてずつとずつと耳にしていなかった…。

「し…んい…ち…新一!」

『わりいな、ずつと連絡出来なくて』

「バ、バカ!バカ!新一…私がどんなに大変だったか…っ」

蘭の瞳からは涙が溢れ出す。

声が震えないよう、必死で話した。

『…知ってるよ』

「え…っ?」

その新一の声は、まるで蘭の事情を、気持ち、全て見透かしたような、暖かくて迫力のある一言だった。

「新一…?」

『…あの眼鏡のボウズに聞いたんだ!ホント悪かった…支えてやれなくて』

(なんだ…コナン君に聞いたのか…)

蘭は少し残念そうに納得する。

「ううん…新一も事件で大変だったんでしょ?」

『ああ…まあな』

少し開いたドアの外では、変声器を使って電話をしているコナンの姿があった。

『3回目の手術、成功したんだってな。よかった…』

「うん…うん…ありがとう…」

蘭は涙を拭って思い出したように言う。

「あ…そうだ、新一。私、怪我をしてる間に新一の変な夢見たよ！」

『オレの変な夢？』

コナンはハア？といった顔で蘭を見た。

「そう！新一がね…拳銃自殺するのよ！何にもない霧の曇った場所で！」

蘭は先程とは見違えるほど楽しそうに話した。

『お…おいおい』

「危ない事件に首突っ込んでると、正夢になるわよ」

（ハハ…まあほどほどにしとくよ…）

ドアの外でコナンは苦笑した。

本当にEND

## おまけ（後書き）

（後書きトーク・ ・ ）ノNo・08

やっと終わりました！！

長いようで長く…うん、長かった。

感想やメッセージを送って下さった方、毎回読んで下さった方、本当に有難うございました！

あたし自身、他の方の小説にちつとも足跡を残していかないのので…申し訳ない限りです。

特にユーリさん、いつもいつも大感謝です

ではまた次回作で会いましょう！

星でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3922d/>

---

明日へ

2010年10月9日15時11分発行